



ダビデが任命した主の宮で歌う歌うたいたち アサフ、ヘマン、エドトン

ダビデが任命した主の宮で歌う歌うたいたち.

2018.11.30

- | | | | |
|--|--|------------------------------------|---|
| <p>ヨシ族
● (左) エドトン
(エタン)</p> | <p>ヘマン族
● ヘマン
(ヘムエラの子
死んだ妻の子)</p> | <p>ゲルシオン族
● (右) アサフ</p> | <p>1歴6 祭壇
1歴9. 備者の祭壇
P47. エドトン. ヨシの子孫</p> |
|--|--|------------------------------------|---|
- ダビデの幕屋に箱が入る。
1歴15: 楽器(シンバル、琴、立琴、ラッパ)
1歴16: 楽長アサフ「主に感謝せよ!...」
- ダビデの老. YDモン人
1歴23-25: 祖孫化. アサフ. エドトン. ^{先死者}ヘマンは預言者子。
24組×35. P47×4. エドトン×6. **ヘマン×14**(ヘムエラの子孫)
- YDモン神殿を建ておえ。
2歴5: アサフ. エドトン. ヘマンの子孫の賛美 → 主の栄光が満ちる。
- ヨシヤの王
2歴20: **アサフの子孫**や**ヘマンの子孫**が. 王に慰められ. 歌い. モアブ. Pモン滅。
- セゼキヤ
2歴29: 神殿の戸を閉じ. 修復者. 礼拝改革. 30: 過越祭. ^{祭壇. 楽器. 預言者} YDモン
- ヨシヤ
2歴35: 律法書. ^{ヘマン}過越祭。
- エズラ
エズ3: 祭壇. 礎. 「主に感謝せよ...」
- ネハシヤ
ネハシヤ11-12: 城壁の再建. **アサフの子孫** P47×4 (P47×P)

ダビデが任命した主の宮で歌う、歌うたい達ということで、アサフとヘマンとエドトンという人がいます。アサフは詩編のタイトルになっています。タイトルのところにアサフと第三巻にたくさん出てきます。

第三巻は、主の宮について歌うものですが、73篇から83篇まではアサフと言われています。あとコラの子たちと。最後に、エズラフ人ヘマンとエズラフ人エタンとあります。このエズラフ人というのはよく分かりませんが、ヘマンとエタンという名前を見たら、ここのヘマンとエタンということを連想するものだろうと思います。エドトンとエタンは音は違うんですけど、語根が一緒なんですね。組で3人出てくる時の組の書き方を見ると、エタンとエドトンは同じ人じゃないかと言われています。

最初に出てくるのが、歴代誌第1の6章。ずっと系図が書いてあるところです。系図が書いてあるところがずっと続いて、15章からのところで選ばれるんですけど、最初の系図が書いてるところを見ると、「アサフが右に、ヘマンが真ん中で、エドトンがエタンが左」と書いてあります。ゲルシオン族、ケハテ族、メラリ族と、レビ人から一人ずつ選ばれてますよね。このヘマンというところを見ると、今回見てて気がつきましたけど、あれあれあれとサムエル、エルカナ、エルカナの子サムエルその人じゃないかと。

そのサムエルですね。サムエルの子ヨエル。このヨエルは神様に逆らったヨエル。ヨエルは、サムエルの長男でした。

その子供がヘマン。サムエルの孫なんですね。こんなところにサムエルの孫がいたとは知りませんでした。ダビデの契約の箱が入るところでそれを言いますね。その後に系図がありますけど、系図のところでは、バビロンから戻ってきたところの系図も続けて書かれていますので、時間が先に一回進んじゃいます。その中にもアサフの子らや、エドトンの子らがいるということがわかります。

第1歴代誌15章でダビデの箱が戻ってきます。レビ人たち、祭司たちを集めて戻して礼拝をするというところで、この三人が選ばれました。立琴と琴とシンバル、喜びの声を上げるということがこの任務ですね。歌うたう者ヘマン、アサフとエタンは青銅のシンバル。他に立琴の人、琴の人、神の箱の前で仕える者たちということです。その箇所で出てきて集まりましたので、ダビデは歌わせるというのが「主をほめたたえよ」という例のダビデの感謝の歌のフレーズです。ここで歌う時の楽長がアサフ。アサフはシンバルを鳴らして、アサフが主体として、この主に感謝せよという歌を歌います。アサフ、ヘマン、エドトンという人たちが歌を歌い、それと門で歌ってるということなんでしょうね。門衛がいますと。

いよいよ今度ソロモンの時代が変わる。ダビデは年を取ってソロモンに王座が移ります。その時には、賛美する人は4千人になっています。門衛も4千人ですけど。そうして、ダビデが組織化するわけですね。レビ人はこうしなさい。ここにこうしなさい。あの人はこうしなさいと。組分けをするというところ、第1歴代誌25章を見ると、この3人の人たち、もしくはその子供たちは預言するんですね。王の命によって預言する。預言して、「先見者ヘマン」と呼ばれたりします。サムエルも先見者と呼ばれていましたね。先見者サムエルの孫ヘマンも先見者。この主の宮で歌っている歌は、預言だというようなことが、ここで分かるかと思います。任命された後に組分けをするんですね。25章で組分けをしますけど、アサフの子らが4人選ばれていますね。エドトンの子らが6人いるのに、6人と書いてあるのに、5人しかここに列挙されていなくて、24組ある中にシメイという人が他にいないので、エドトンの子供なんじゃないかということで、70人訳ではここにシメイと入ってるようです。4人、6人、それでヘマンの子供たち14人がいるわけですから、サムエルのひ孫が14人このグループに入っているという、このうた歌いたちですね。

それでソロモンが今度は神殿を建てます。神殿を建てて契約の箱を持ってきましたというところでアサフ、ヘマン、エドトンの子供たち120人と一緒に立って歌を歌う。ここで「主の恵みはとこしえまで」という歌を歌うと、主の栄光が神殿に満ちます。この後に神殿封建の祈りを捧げることとなります。その後、ソロモンも同じように、父ダビデの命令に従って、組み分けをして奉仕させるということをしています。

その後、時間が経ちまして、ダビデの道、父ダビデの道に歩む王たち。王たちが離れてひどい状態になりますけど、父ダビデの道に歩む王たちという人たちが何人かいる中で、ヨシャパテ、ヒゼキヤ、ヨシヤというこの3人の王様のところに神殿で歌を歌うということが書かれています。ヨシャパテの話は、第2歴代誌20章です。アモン人、モアブ人に攻撃されてるヨシャパテが、主に顔を向けて助けを求めている。断食しますと言ってるような時に、主の霊がアサフの子孫であるヤハジエルに臨みます。アサフの子孫ヤハジエルが立って、王達と民を励ますという歌を歌うということですね。「歌いましょう」と言って賛美をして「主に感謝せよ」という歌を歌うと、伏兵を設けてアモン人モアブ人は散らされたということが、ここにあります。ヨシャパテが帰ってきて歌を

歌うと、エルサレムの主の宮に来ましたと言って、立琴、ラッパ、琴を持って集まってくるということが書かれてるということですね。このヤハジエル、アサフの子孫ヤハジエルがヨシヤパテの時に活躍しました。

ヒゼキヤの時には、ヒゼキヤが神殿の戸をもう一度と開きますという修復しますと言って礼拝改革をするところで、アサフの子孫、ヘマンの子孫、エドトンの子孫という人たちを集めてきます。レビ人たちの中から。それでダビデに言われたように、預言者によって命じられたことをしますと。ここでダビデと先見者アサフの言葉をもって賛美するということを知って、ヒゼキヤは礼拝改革をして、歴代誌30章で、過ぎ越しの祭りをしましょうと。悔い改めて立ち返って過ぎ越しの祭りをしましょうということで、過ぎ越しの祭りをしました。そのような過ぎ越しの祭りは、「ダビデの子ソロモンの時代からこのかた、エルサレムにありませんでした」というところがありますね。30章に過ぎ越しの祭りを書いてあります。

次に時代がまた進んでヨシヤ、ヨシヤも礼拝改革をしましたね。律法の書を発見した。なくなってしまうのをもう一度戻しました。それで書かれている通りに過ぎ越しの祭りをします。過ぎ越しの祭りをするというところで、「アサフの子孫である歌うたいたち、アサフ、ヘマン、エドトンの命令に従って」ということがここにも書いてあります。

このヨシヤの時には「預言者サムエルの時からこのかた、過ぎ越しの祭りはなかった」と言っていますので、このソロモン、サムエルという時代のことをさしているところですけども、その時に歌っていたのは、アサフの子孫、ヘマンの子孫、エドトンの子孫だということですね。残念ながらバビロンに連れて行かれます。バビロンに連れて行かれた後、戻ってきた時に、最初の歴代誌の系図のところにも書いてありましたけれど、アサフの子らや、エドトンの子らが戻ってくるわけです。エズラ記に書いてあるように。宮の基礎が据えられた時にラッパをとり、アサフの子らであるレビ人はシンバルを取りと。そして「主に感謝せよ」と

この歌をまた歌うわけです。残念ながらそこで一時中断しますよね、邪魔が入って。それでネヘミヤ記の11章からのところで、城壁がやっと再建されるというところにマッタニヤとここに書いてありますね。マッタニヤと。新改訳だとマタヌヤ。アサフの子孫。アサフの子孫という割には、第何代目かが短すぎるのですけれど、ひ孫になってしまうのですけど。これだと500年ぐらいあるのに、ひ孫になっていますけど、マタイの系図の見方と似てるのかな。間が飛んでるように思いますけれども、アサフの子孫であるマッタニヤ、もしくはマタヌヤという人が、ここで何度も出てくるんですね。マタヌヤ、マタヌヤと言って、ネヘミヤ記の再建のところで、組になって感謝する者たち、城壁の上で歌うような人たちをまとめる人は、このアサフの子、子らというもののようです。「歌うたい」という言葉は、このネヘミヤ記に多いですね。他の書物よりもネヘミヤ記に多い。再建する時に、一番働いている人のようにも思いますよね。この歌を歌う、喜び歌うということが、どんなに神殿を再建する神殿に集まること、神殿を再建することの中で、中心的なものなのかということは、そういうことでも分かると思うんですけど、その中で「マタヌヤ」という人がいるよということ覚えておきましょうか。ダビデはアサフの日に歌ったようにゼルバベル、ネヘミヤの日にも、歌うたう者、門を守る者たちがいるということです。